

# 論村上春樹〈飛機，或者他怎麼像在念詩般自言自語呢？〉的女性像—女性沉默的多層性—

王嘉臨

淡江大學日本語文學系副教授

## 摘要

村上春樹〈飛機，或者他怎麼像在念詩般自言自語呢？〉於1989年寫成，收錄在短篇小說集《電視人》中。本篇小說是村上初次使用第三人稱敘事者「彼」代替過去以「僕」全程敘述的手法。過往先行研究多著重於此敘事模式，強調作品中女性的主婦故事。近年來，學者們認為主婦故事的主題乃是受到第三人稱敘事者「彼」的男性本位視角所影響，故轉向從作品中的女性告白切入，強調作品中女性的母女關係。在這些論述中可發現，針對此作品的研究，多是只限於第三人稱敘事或者只聚焦於女性告白的討論，兩者擇其一。綜觀村上春樹的女性作品，女性的主體往往交織多元因素，為多重身分的主體。故筆者認為過往的單線式論述限制了作品中女性像的解讀，無法展現出村上作品中女性的多元樣貌。本論文嘗試將作品中的第三人稱敘事及女性告白串連一起討論，重新梳理作品中女性像。

考察結果得知，兩個敘事內容皆描述了女性的沉默，不單只是被動及自願屈從，作品中透過不同場合描述出沉默背後的反抗意識及女性情感。在父權社會裡，女性必須保持沉默。本作品透過女性沉默的多層性獨特意涵，描繪出女性自我主張的新形態。雖在敘述技法上未必成熟，本小說重新詮釋過去被忽略的女性沉默多層性議題，深具實驗意味。

關鍵詞：村上春樹、女性像、〈飛機，或者他怎麼像在念詩般自言自語呢？〉、女性的沉默、多層性

受理日期：2023年08月31日

通過日期：2023年10月20日

DOI：10.29758/TWRYJYSB.202312\_(41).0007

# **Exploring the female image in Haruki Murakami's " Aeroplane; Or How He Talked to Himself as If Reciting Poetry " : The Multilayered Nature of Female Silence**

Wang, Chia-Lin

Associate Professor, Department of Japanese, Tamkang University

## **Abstract**

Haruki Murakami's 1989 work 'Aeroplane Or How He Talked to Himself as If Reciting Poetry' signifies a notable shift in his narrative style by employing a third-person 'he' instead of the previously used 'I'. While earlier research emphasized the portrayal of women as housewives due to this shift, recent discussions delve into women's confessions and mother-daughter relationships within the narrative. These discussions often focus solely on the third-person narrative or women's confessions. This thesis aims to bridge this gap, comprehensively reevaluating the depiction of female characters.

The examination results reveal that the third-person narrative and female confessions depict women's silence not merely as passive and voluntary submission. Through descriptions in various contexts, the underlying resistance and emotional complexity behind this silence are unveiled. In a patriarchal society, women are expected to maintain silence. This novel depicts a new form of female self-expression through the multilayered nature of female silence. Though not fully mature in narrative technique, this novel reinterprets overlooked layers of female silence, embracing an experimental essence.

Keywords: Haruki Murakami, Female Image, " Aeroplane; Or How He Talked to Himself as If Reciting Poetry ", Female Silence, Multilayered Nature

村上春樹「飛行機—あるいは彼はいかにして詩を読むようにひとりごとを言ったか」における女性像  
—沈黙の重層性—

王嘉臨

淡江大学日本語文学科准教授

要旨

「飛行機—あるいは彼はいかにして詩を読むようにひとりごとを言ったか」(以下「飛行機」と略す)は、1989年に『ユリイカ』に発表され、のち短編集『TVピープル』に収録された。村上の小説の中で初めて「彼」という三人称の語り手が登場する三人称の物語で、この作品は大変重要な作品だと言える。これまでの研究は主に「彼」の言葉あるいは「彼」と「彼女」の対話のどちらかに着目することで行われてきた。本論文ではこうした従来の観点を脱し、「飛行機」の新たな読解の可能性として作品に展開される「彼」の言葉と二人の対話という二種類の異なった言述を分析し、これまで一面的に捉えられてきた「彼女」の女性像を解きほぐし、その複雑な様態を明らかにする。その結果、「飛行機」においては、様々な場面で沈黙を通して、けっして一面的ではない複雑な意味の構造を持っている女性の沈黙を表象させ、家父長制社会に置かれる女性の自己表現のあらたな方法が提示されたことがわかる。語りの限界は露呈したものの、これまで看過されてきた女性の沈黙の重層性の意味を新たに組み組んだ「飛行機」は、一つの実験の場ともなったと言える。

キーワード：村上春樹、女性像、「飛行機—あるいは彼はいかにして詩を読むようにひとりごとを言ったか」、女性の沈黙、重層性

村上春樹「飛行機—あるいは彼はいかにして詩を読むようにひとりごとを言ったか」における女性像  
—沈黙の重層性—

王嘉臨

淡江大学日本語文学科准教授

1. はじめに

短編「飛行機—あるいは彼はいかにして詩を読むようにひとりごとを言ったか」(以下「飛行機」と略す)は、1989年に『ユリイカ』に発表され、のち短編集『TVピープル』に収録された。村上の小説の中で初めて「彼」という三人称の語り手が登場する三人称の物語で<sup>1</sup>、この作品は大変重要な作品だと言える。そして、「飛行機」については、短編集に収録されている「眠り」や「我らの時代のフォークロア—高度資本主義前史」と共通する専業主婦を描いているため、従来「主婦の物語」として捉えられ、同時代的コンテクストに収斂されている。例えば、太田鈴子はこの三篇を「結婚生活を幸福だと思いつつも、不安定な心を抱えている専業主婦の物語である」<sup>2</sup>と指摘している。また、酒井英行も「「女」(「俺はだいたいこの女に愛情を抱いているのだろうか」という具合に、「彼」が「彼女」を「女」と意識している)としての「彼女」は専業主婦としての家事労働(ルーティン)に縛られた、妻、母という性役割を担わされた存在である」と指摘し、作品における「女性の抑圧の構造」<sup>3</sup>を分析している。

一方、従来の先行論における「主婦の物語」というスタンスから脱しようとして、平野葵は作品における女性の母娘関係の問題に着

<sup>1</sup> ジェイ・ルービン(2006)『ハルキ・ムラカミと言葉の音楽』新潮社 p.152

<sup>2</sup> 太田鈴子(2004)「妻・母を演じる専業主婦—村上春樹『TVピープル』の女性たち—」『学苑』第762号 p.53

<sup>3</sup> 酒井英行(2002)「村上春樹・『飛行機—あるいは彼はいかにして詩を読むようにひとりごとを言ったか』」『人文論集』第53巻1号 p.60

目して論じている。平野は「彼女」の本当の問題は、自らの母親に対する反発と疑問、そして母親から受けた虐待に起因する娘との関係の不調なのである」と分析したうえで、「この作品を現代の主婦問題という枠組みで解釈すること自体が、或る種の「偏見」なのではないだろうか」と指摘している<sup>4</sup>。それまで十分な研究がなされてこなかった母娘関係に焦点を当てた平野の研究は、「主婦の物語」として捉えられがちなこの作品の読みを広げる視点を提供してくれるものである。

しかし、「彼」の語りの内容に重点を置いた「主婦の物語」の読みは単なる「偏見」にとどまるだろうか。「彼」の語りの内容は男性の視点によって作られた女性の物語であり、男性が語る物語の背後に潜む女性の物語の存在に目を向けるべきだとする平野の論点のスタンスからすれば、「彼」の語りの内容である「主婦の物語」が「偏見」となるのも当然の帰結であろう。だが、村上の女語りの作品を読めば、その主人公は、母である「私」、娘である「私」、妻である「私」、主婦である「私」、そして自立した女である「私」など複数のボイスを抱えており、それらの中での葛藤があったことが窺える<sup>5</sup>。すなわち、女性が多様な葛藤を抱えていて、母との対立問題にとどまらないのである。したがって、性急に「主婦の物語」を排除し、本作品における女性像を母娘関係の問題として一括りにして考えることには無理があろう。つまり、「彼」の言葉あるいは「彼」と「彼女」の対話のどちらかにのみ着目すると、女性人物の一面的な姿を捉えるにとどまり、かえって二種類の異なった言述に描かれる重層的で、多様な要素が交錯する女性像を単純化してしまいかねない。

---

<sup>4</sup> 平野葵（2011）「母娘関係の檻の中で—村上春樹「飛行機—あるいは彼はいかにして詩を読むようにひとりごとを言ったか」論」『層—映像と表現』第4巻 pp.95-109

<sup>5</sup> 拙稿（2021）「村上春樹文学における女性の主体性—「妻」の表象をめぐって—」（『台湾日語教育學報』第36号）、拙稿（2022）「村上春樹文学における女性像—「緑色の獣」を中心に—」（『台湾日語教育學報』第38号）および拙稿（2023）「村上春樹「眠り」における女性像—女性の孤独感」（『台湾日語教育學報』第40号を参照

以上を踏まえて、本論文では「飛行機」の新たな読解の可能性として、「彼」の言葉あるいは「彼」と「彼女」の対話のどちらかにのみ着目する従来の観点を脱し、作品に展開される「彼」の言葉と二人の対話という二種類の異なった言述を分析する。その上で、これまで一面的に捉えられてきた「彼女」の女性像を解きほぐし、その複雑な様態を明らかにする。

## 2. 「彼」による「彼女」の物語—結婚と沈黙

「飛行機」は、視点人物である「彼」が過去に体験した出来事を語る構成を取っている。そして、物語の中心に置かれているのは二十歳の頃に付き合っていた二十七歳の「彼女」との出来事である。まず、作品の序盤で「彼」と「彼女」について、次のように紹介されている。

彼は二十歳になったばかりだった。女は彼より七つ歳上で、結婚していて、子供までいた。要するに彼女は、彼にとっては月の裏側みたいなものだったわけだ。

彼女の夫は海外旅行を専門にする旅行会社に勤めていた。そのせいで月の半分近くは家を留守にしていた。ロンドンやらローマやらシンガポールやらにでかけていた。夫はオペラが好きらしくて、家にはヴェルディやらプッチーニやらドニゼッティやらリヒャルト・シュトラウスやらの三枚組・四枚組の分厚いレコードが、作曲家別に整理されてずらりと並んでいた。それはレコード・コレクションというよりは、むしろある種の世界観の象徴のように見えた（後略）(p.48)。

「彼」は二十歳になったばかりで、そして「彼女」は「海外旅行を専門にする旅行会社」に勤務する夫と幼稚園に通う四歳の娘を持つ主婦である。海外を飛び回る職業柄、「彼女」の夫は月の半分ほど不在である。男性が外に出るのに対して女性が家にとどまるという

ように、作品において社会活動は男性の領域であり、家庭における事柄は女性の領域であると提示されている。しかし、ここで注目しておきたいのは、女性の領域である家庭空間における夫の権威である。

オペラ好きの夫が所有するレコード・コレクションは、「作曲家別に整理されてずらりと並」び、そして、その横にあるステレオ装置は「外国製の大きな真空管アンプがよく統御された甲殻動物のように、重々しく身をかがめて命令を待 (p.48)」ち、「存在感そのものが際立っていた (p.49)」というように、夫の嗜好が家庭という空間の中で存在感を放っている。住居とジェンダーの関係について、神野由紀は次のように指摘している。

戦後、外で働く男性に代わり住まいのインテリアの主導権を握ったのは女性であった。日本で専業主婦率が 1970 年代にピークとなる状況下で、女性は「家庭のため」の余暇として、手の込んだ手芸作品の制作に熱中した<sup>6</sup>。

神野によれば、女性の活動空間を家庭内、男性を家庭外と区別する性別役割分業の観念により、室内装飾もまたジェンダー化され、とりわけ日本では手芸が「女性らしさ」、「母の愛情」として位置づけられたとのことである。では、作品に描かれる家庭空間を見ていこう。「彼女」はオペラを「嫌いじゃないわよ (p.48)」、「でも長すぎる (p.48)」と言い、また夫のステレオ装置に対しても「電源スイッチの位置さえ知らなかった (p.49)」と、夫との嗜好の違いが示されており、夫との間に大きな隔たりが存在している。すなわち、神野が指摘した、女性がインテリアの主導権を握り女性の領域としてジェンダー化された家庭空間とは異なり、夫に準じる「彼女」と夫との関係性が空間のインテリアによって体现されているのである。こ

---

<sup>6</sup> 神野由紀 (2022)「戦後日本のインテリアデザインとジェンダー」『日本デザイン学会 第 69 回研究発表大会概要集』 p.1

のように、「飛行機」では、あからさまに男性支配が描かれているわけではないが、家の室内装飾によって、夫との関係のなかで沈黙を強いられている「彼女」の姿が読み取れるのである。

しかし、「彼女」は喜んで沈黙に応じていたわけではない。次の引用文は、「彼女」の内面の葛藤を反映している。

家庭に問題があるわけではないのだ、と女は彼に言った。何度も繰り返してそう言った。夫は優しくていい人だし、子供のこともとても愛している、たぶん私は幸せなんだと思う、彼女は穏やかに、淡々とした口調でそう言った。言い訳がましい響きはなかった。彼女は交通規則や日付変更線について話すみたいに客観的に結婚生活について語った。私は幸せなんだと思う、問題と呼べるような問題はなにもないのよ、と (p.49)。

「彼女」は「夫は優しくていい人」で、「子供のこともとても愛し」、結婚生活に「問題と呼べるような問題はなにもない」と主張しながらも、「たぶん私は幸せなんだと思う」とし、自分の結婚生活が幸福であることを自分に言い聞かせるように繰り返している。ここから、「彼女」が決して現状維持で満足するという姿勢ではなかったことがわかる。酒井英行は「彼女」のあり方について、次のように指摘している<sup>7</sup>。

自己納得出来ないのに、問い質すことすら出来なかった無力な「彼女」。それと同じように、大人になった今も、男性中心社会の規範、男性原理に何故従属しなければならないのか、「彼女」には理解出来ないのだ。しかし、「とても確固として」いる規範の圧力の前で、自我を目覚めさせておけば、自己葛藤が大きいから、「彼女」は、自我を眠らせるしかないのである。(引用部

---

<sup>7</sup> 前掲酒井英行「村上春樹・『飛行機-あるいは彼はいかにして詩を読むようにひとりごとを言ったか』」 p.63



分の下線は引用者。以下同じ)。

酒井はこうした「彼女」を「生きる感動から疎外された無力な存在」と位置付けた<sup>8</sup>。沈黙の概念は、家父長社会における男女の間の権力関係を考える際に不可欠な要素である。特に、沈黙はしばしば女性の抑圧の証拠とみなされ、女性の弱さ、女性の無力を象徴している。しかしながら、「彼女」の沈黙は単に女性の消極性と一括りにしていいだろうか。

アドリエヌ・リッチは『女から生まれる』で、父権制のもとでは「私が憂鬱でも、激しい怒りを感じても、束縛されているという思いで悩むときも、夫は私を愛しているからその重荷を我慢して受けとめてくれていると思いきこんでいた。それほどの重荷を負わせながらも夫に愛されるのを感謝すらしていた」<sup>9</sup>というように、夫や子供につくすことが女性の本分であるとされていたため、女性の家族に対する憎しみや怒りなどの否定的な感情はタブー視され、あってはならないものとみなされていると述べている。リッチが指摘するように、子供に対する愛情や自己献身的な感情のみが表現を許されるなら、「彼女」の結婚生活への懐疑はことさらタブーであり、禁じられる話題となるのである。そうすると、結婚生活に対して懐疑を抱きながらも声を上げることをしない「彼女」の沈黙には、決して現状維持で満足しているわけではなく、だからといってタブーを破り状況を変えることもできはしないというような、言語化しえない悲しみややるせなさといった複雑な意味の感情が内包されていると考えられる。したがって、問題とすべき点は、女性の沈黙を女性の無力、女性の消極性に還元することより、むしろ夫との関係性、そして女性を取り巻く社会規範という何重にも強いられる女性の沈黙の重層性であり、女性の沈黙のなかにある複雑な意味を探ることで

---

<sup>8</sup> 前掲酒井英行「村上春樹・『飛行機-あるいは彼はいかにして詩を読むようにひとりごとを言ったか』」 p.63

<sup>9</sup> アドリエヌ・リッチ (1990)『女から生まれる』晶文社 p.34

ある。

### 3. 「彼」と「彼女」の対話による物語—母の教えと沈黙

目的や「共通する話題もあまりなかった (p.50)」二人は、肉体関係を結ぶものの、「正確な意味での肉の喜びというものはなかった (p.50)」というように、乗り越えられない断絶感を抱えている。そして彼は、「俺はだいたいこの女に愛情を抱いているのだろうか」と、彼は自分に向かって何度も問いかけて (p.51)」みて、「時折自分が圧倒的な混迷の中を彷徨 (p.51)」っていた。しかし、共鳴できるものを共有していないからといって二人の関係性が断絶しているわけではなく、ある媒介によって結びついていく。それが、飛行機のひとりごとである。以下、こうした飛行機のひとりごとを中心に、「彼」と「彼女」の対話による物語について考察していく。

その午後、彼女が訊ねた。「ねえ、あなた昔からひとりごとと言う癖があったの？」彼女はまるでふと思いついたように、テーブルから静かに顔を上げてそう言った。でもそれがふとした気まぐれで思いつかれた質問でないことは明らかだった。彼女はおそらくそれについてずっと考えていたのだ。彼女の声にはそういう場合につきものの、少しかすれたような固い響きがあった。実際に口に出されるまでに、その言葉は彼女の舌の上で何度も何度もためらいがちに転がされていたのだ (p.47)。

ある日、「彼女」がいつものように泣き、二人の終わりが終わった後、「彼女」はためらいがちに「彼」が「ひとりごと」を言っていることを教えた。そして、こうした「ひとりごと」を媒介として、二人が同じものについて考える瞬間が起こり、「ひとりごと」をめぐる会話が繰り広げられる。ここで、「彼女」は初めて「ひとりごと」をめぐる母の教えを打ち明けた。

「私も子供のころはよくひとりごとを言ったわ」

「そう？」

「でもお母さんになおされたの。みっともないからって。それでひとりごとを言うたびにきつく叱られたの。押し入れに入れられるとかね。(中略)それで、そのうちにひとりごとというものを言わなくなってしまったの。まったく言わなくなってしまったの。いつの間にか、言おうと思っても言えなくなってしまったのよ」(p.53)

「彼女」は、自分も子供の頃よく「ひとりごと」を言ったが、死んだ母親にきつく叱られて矯正された。日本の近代家族においては、家族の情緒性、親密性が強調されている。特に母は、「出産や育児を超えて、家族や共同体のトラブルに心を痛め、和解を促し、平和を保ち、戦いで傷ついた者を介抱し、罪ある者を許す女性像となって、母性を定義してきました」<sup>10</sup>と無償の愛を与える存在としてみなされ、求められてきた。ところが、「飛行機」においては、母は娘に何らかを与えるのではなく、娘を抑圧する存在と言える。そして、「今でも何かふと言葉が出そうになっても、反射的にそれを飲み込んでしまうの。子供の頃に叱られたせいで (p.53)」と「見方によっては虐待だということもできる」<sup>11</sup>と指摘されるくらい厳しい母のしつけが強い影響を及ぼしており、「彼女」は今でも「ひとりごと」を言うことができず、沈黙したままなのである。

このように、「飛行機」では単なる結婚と沈黙の組み合わせだけでなく、母の教えを通した母による娘の支配の結果としての沈黙も描かれており、女性の沈黙が持ちうる多様で複雑な意味が提示されている。

---

<sup>10</sup> 水田宗子(1996)「娘による母物語から母による母物語へ—近代文学の中の母と娘」水田宗子・北田幸恵・長谷川啓編著『母と娘のフェミニズム』田畑書店 p.117

<sup>11</sup> 前掲平野葵「母娘関係の檻の中で—村上春樹「飛行機—あるいは彼はいかにして詩を読むようにひとりごとを言ったか」論」 p.101

近代文学における娘の物語においては、「娘たちが、成長し、自立していくためには、どこかで母親を拒否し、乗り越えていく、象徴的な形で<母殺し>をする必要があった」<sup>12</sup>という形式が定番となっている。だとすれば、「飛行機」では母はすでに亡くなっている、つまり母の死という<母殺し>のプロットの範疇にありながらも、依然「ひとりごと」が言えず沈黙している「彼女」のあり方には、どのような意味があるのだろうか。以下、この点について見ていく。

「亡くなったの？」

「うん」と彼女は言った。「でもきちんと訊いてみたかった。どうして私にあんなことしたのかって」(p.53)

「彼女」の母親はすでに亡くなっている。そうすると、母の言葉が力を持つとは言え、当人が亡くなっている以上、これは<母殺し>のプロットの範疇にあるはずである。しかし、母の存在は当人が亡くなっている今でも「彼女」に影響している。「でもきちんと訊いてみたかった。どうして私にあんなことしたのかって」と、「彼女」は母の厳しいしつけに対して疑問を抱きながらも、母の言葉を切り捨てることができなかった。それゆえに、「彼女」は近代文学における娘たちのように自立することができず、母の呪縛に苦しんだままなのである。

このように、「飛行機」ではひとりごとをめぐる「彼女」の娘時代の思い出を描くことで、結婚後の沈黙よりもさらに深く埋め込まれた母の厳しいしつけによる沈黙が示される。前述したように、この作品については、主婦の物語もしくは母娘の物語というように単線的な議論になりがちである。しかし、女性の沈黙に着目するならば、一見並列的に見える二つの物語にも交錯する要素が存在し、作中の沈黙は作品世界に奥行きを与え、重要な役割を果たしていることが

---

<sup>12</sup> 前掲水田宗子「娘による母物語から母による母物語へ—近代文学の中の母と娘」p.133

わかる。

#### 4. 沈黙にみる絆の可能性

二人の会話は「彼」が詩を読むように言った飛行機をめぐるひとりごとの話題で収束へと向かう。

「私、ちゃんと全部そらで覚えてるのよ」と彼女は言った。  
「これが飛行機についてのひとりごと」  
彼は声を出してそれを読んできた。

飛行機

飛行機が飛んで

僕は、飛行機に

飛行機は

飛んで

だけど、飛んだとしても

飛行機が

空か

「これだけ？」と彼はいささか啞然として言った。

「そうよ、それだけ」と彼女は言った (p.56)。

「彼女」はそらで、「彼」のひとりごとをメモ用紙に書いてみせた。飛行機が暗示するものとは何か。酒井英行は作品に頻繁に現れる「電車」に着目し、「飛行機」と「電車」の対比性を指摘した。

<ひとりごと>を禁圧する現実（日常性）の象徴が、作品の題名の<飛行機>と対関係にある<電車>であろう。そして、<電車>と補完関係にある<時計>。(中略) 通勤、買物などの近距離移動のための<電車>。現実（日常性）そのものの象徴という他あるまい。決められた軌道の上を、機械的に、繰り返し移動するだけの<電車>。<詩>を無効化し、解体させてい

く、同じことの繰り返し。＜電車＞は、我々が埋没するルーティンそのものなのである<sup>13</sup>。

酒井は＜飛行機＞についてのひとりごとには、「「彼女」の主婦としてのルーティン、日常的現実からの離陸の願望が託されている」<sup>14</sup>と述べている。確かに、生活の場を家/家庭に限定される女性にとって地上から遊離して空を飛ぶことは、日常生活から解放されることになるのかもしれない。しかし、注目しておきたいのは、「飛行機が飛んで。僕は、飛行機に。飛行機は飛んで」と空を自在に飛ぶ飛行機に広がる明るさ、移動の自由を暗示する言葉の直後に、その言葉を否定するような言葉をつないでいく点である。「だけど、飛んだとしても」と。つまり、飛行は日常から離れる意味を帯びていたわけであるが、しかし、それが一時的な解放期間でしかなく、永遠に続くことはないのである。換言するならば、現状に対して身動きの取れない閉塞感が、飛行に憧れる心情の背後には隠されていると言えるのではないだろうか。

ここで非常に興味深いのは、詩のあとに続く「二人はしばらく黙っていた。テーブルの上でコーヒーは濁りつづけ、冷めつづけた。地軸が回転し、月が密やかに重力を変化させ潮を作った。沈黙のなかで時間が流れ、線路の上を電車が通過して行った。彼も女も同じことを考えていた (p.57)」という沈黙によって仄めかされた絆のありかたである。当初、共通する話題もなく、疎隔感を抱えている二人は、「でもさっきあなたはお風呂場でちゃんとそう言っていたのよ。だからあなたが飛行機のことを考えていなかったとしても、あなたの心はどこか遠い森の奥の方で飛行機のことを考えていたのよ (p.57)」「あるいはどこか森の奥の方で飛行機を作っていたのかもね (p.57)」というように、飛行機に関する想像を共有することで、

<sup>13</sup> 前掲酒井英行「村上春樹・『飛行機-あるいは彼はいかにして詩を読むようにひとりごとを言ったか』 p.58

<sup>14</sup> 前掲酒井英行「村上春樹・『飛行機-あるいは彼はいかにして詩を読むようにひとりごとを言ったか』 p.65

情緒的な一体感が生み出された。そして、沈黙しながらも、同じことを考えている二人の行動はこうした共鳴感を表している。つまり、表面ばかりの言葉ではなく、沈黙に込められた黙契という非言語でのコミュニケーション、絆のあり方が提示されているのである。

以上、作品の結末における沈黙の意味について考察してきた。一見すると何の意味も帯びていない沈黙は、黙契という隠された感情を体現したものである。このように、「飛行機」においては、様々な場面で沈黙を通して、けっして一面的ではない複雑な意味の構造を持っている女性の沈黙を表象させている。

中期において、村上春樹は繰り返し女性を主人公に据えた女語りの作品で女性の生き方や女性のボイスを模索している。家父長制社会では、沈黙が女性の美德とされ、女性が発言することには大変な困難が付きまとう。その意味で、多様で複雑な要素が交差している女性の沈黙を前景化し、非言語的自己表現の手段として沈黙を提示している「飛行機」は、家父長制社会に置かれる女性の自己表現のあらたな方法を示唆した作品だと考えることが出来よう。

## 5. おわりに

「飛行機」は、村上の小説の中で初めて「彼」という三人称の語り手が登場する三人称の物語で、大変重要な作品だと言える。このように、小説の技法という点からすれば、この小説は成功と言えるだろうか。

「飛行機」において、語り手である「彼」は二十歳の頃に付き合っていた「彼女」との出来事を語り、過去の経験に意味を与えている。「彼女」と「ひとりごと」の関係、「彼女」の「彼」に対する「ひとりごと」をめぐる質問、そして、副題である「あるいは彼はいかにして詩を読むようにひとりごとを言ったか」とあるように、物語において「ひとりごと」の問題が極めて重要な役割を持っている。だが、興味深いのは、そもそも独り言がコミュニケーションを指向しない、自分自身に向けられた発話である。「社会的な暗黙の了解か

ら、周囲に人がいる前で独り言を話すことは避けるべきことにな<sup>15</sup>り、「多くの人が無意識に話しているもの」<sup>16</sup>とされる独り言は無意識の表出と考えられる。すると、語り手「彼」が沈黙している「彼女」と「ひとりごと」の関係や二人の関係性における「ひとりごと」の問題を語ることで、普段人前では口にしない、語られない女性の内面が提示され、沈黙させられている女性には実は伝えるべき多くの自分の物語があるということを示唆していると言えるのではないだろうか。要するに、「情緒不安定、社会的不適応、衝動的な人は不安定になった気持ちを立て直すためにひとり言を発する」<sup>17</sup>とあるように、独り言は病的なものに見なされているため、たとえ女性が独り言を通して自分を語っているとしても、正常的な発言としては認められない。したがって、三人称の語り手を導入することによって、女性の無意識の表出が言語化され、表象されているのである。

しかし、物語中において語り手である「彼」の限界を示唆する興味深い挿話があるので、言及しておきたい。結婚生活が破綻しているわけではなく、何故「彼女」が自分と不倫したかという疑問に対して、「彼」は「だいたい結婚生活における問題というのが具体的にどんなことを意味するのかさえよく理解できなかったのだ。彼女に直接訊いてみようと思ったこともあったが、うまく切り出せなかった。なんて訊けばいいんだ？そんなに幸せならどうして僕となんか寝るんだ、と率直に質問すればいいのだろうか？でもそんなことを訊いたら、きっとまた泣くんだらうな (p.49)」と述懐した。つまり、夫との関係性、そして女性を取り巻く社会規範という何重にも強いられた「彼女」の沈黙の意味は二十歳になったばかりの「彼」に理解できるはずもなく、ましてや沈黙する「彼女」の「泣く」の意味を解釈する能力もなく、「彼はそれまでに何人かの女とつきあったことがあった。彼女たちはみんなそれぞれ泣いたり怒ったりした

---

<sup>15</sup> 杉本早奈美 (2022) 「大人の独り言に関する探索的な研究」『金城学院大学大学院人間生活学研究科論集』第 22 号 p.30

<sup>16</sup> 前掲杉本早奈美 「大人の独り言に関する探索的な研究」 p.30

<sup>17</sup> 前掲杉本早奈美 「大人の独り言に関する探索的な研究」 p.23



(p.49)」というように、女性一般の特質という理屈に回収されてしまった。

このように、空白が残る形となっている。換言すると、この小説は女性の沈黙を語ることに於いて、大きな壁にぶつかったと言えよう。その意味で、限界は露呈したものの、これまで看過されてきた女性の沈黙の重層性の意味を新たに取り込み、家父長制社会に置かれた女性の自己表現のあらたな方法としての沈黙を示唆した「飛行機」は、一つの実験の場ともなったわけである。

### テキスト

村上春樹 (1991) 『村上春樹全作品 1979～1989 ⑤短編集Ⅱ』  
講談社

村上春樹 (1991) 『村上春樹全作品 1979～1989 ⑧短編集Ⅲ』  
講談社

### 参考文献

アドリエヌ・リッチ (1990) 『女から生まれる』、東京、晶文社

王嘉臨 (2021) 「村上春樹文学における女性の主体性—「妻」の表象をめぐって—」『台湾日語教育學報』第 36 号、台北、台湾日語教育學會 pp.272-290

王嘉臨 (2022) 「村上春樹文学における女性像—「緑色の獣」を中心に—」『台湾日語教育學報』第 38 号、台北、台湾日語教育學會 pp.231-248

王嘉臨 (2023) 「村上春樹「眠り」における女性像—女性の孤独感—」『台湾日語教育學報』第 40 号、台北、台湾日語教育學會 pp.150-167

太田鈴子 (2004) 「妻・母を演じる専業主婦—村上春樹『TV ピープル』の女性たち—」『学苑』第 762 号、東京、光葉会 pp.53-61

酒井英行 (2002) 「村上春樹・『飛行機—あるいは彼はいかにして詩を読むようにひとりごとを言ったか—』」『人文論集』第 53 卷 1 号、

- 静岡、静岡大学人文学部 pp.51-65
- ジェイ・ルービン (2006)『ハルキ・ムラカミと言葉の音楽』、東京、新潮社
- 神野由紀 (2022)「戦後日本のインテリアデザインとジェンダー」『日本デザイン学会 第 69 回研究発表大会概要集』、東京、日本デザイン学会 pp.196-197
- 杉本早奈美 (2022)「大人の独り言に関する探索的な研究」『金城学院大学大学院人間生活学研究科論集』第 22 号、名古屋、金城学院大学大学院人間科学研究科 pp.21-30
- 平野葵 (2011)「母娘関係の檻の中で—村上春樹「飛行機—あるいは彼はいかにして詩を読むようにひとりごとを言ったか」論」『層-映像と表現』第 4 巻、札幌、北海道大学大学院文学研究院映像・現代文化論研究室 pp.95-109
- 水田宗子 (1996)「娘による母物語から母による母物語へ—近代文学の中の母と娘」水田宗子・北田幸恵・長谷川啓編著『母と娘のフェミニズム』、東京、田畑書店